

大英図書館所蔵四福音書写本バーニー19番について

瀧口 美香

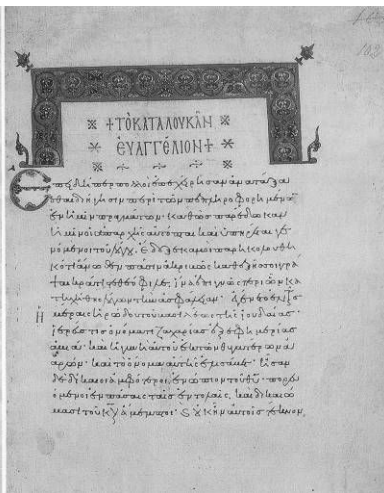
本稿では、大英図書館所蔵の四福音書写本バーニー19番をとりあげて、コディコロジカルなアプローチを試みたい。このようなアプローチを通して、制作当時から今日に至るまで何世代にも渡って受け継がれてきた、一冊の写本の足跡をたどってみたい。写本は現在このような体裁をとっているが、制作当初からこうした形のものだったわけではない、という点を明らかにすることが本稿の目的である。

バーニー19番は、10世紀後半に制作されたものであると言われている。ところが、写本中に挿入されている福音書記者の肖像は、12世紀後半に描かれたものである。

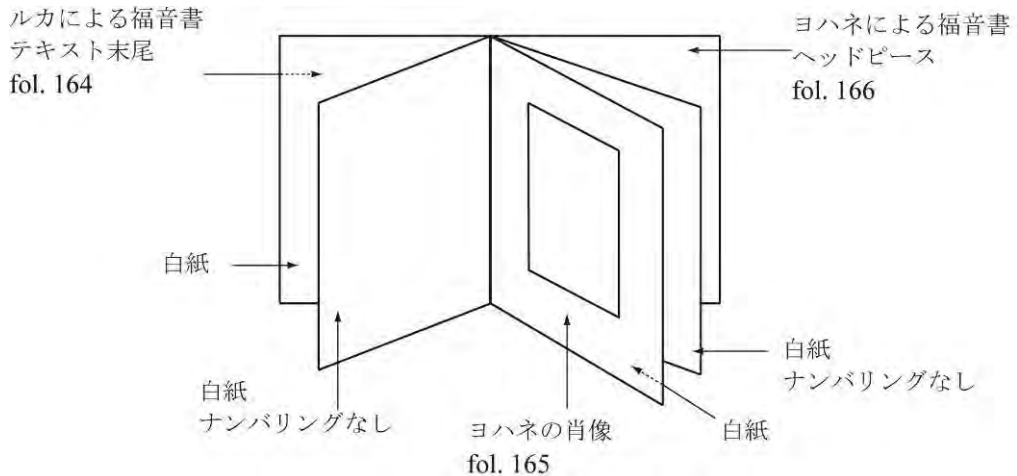
ルカの肖像は、見開きの左手にあって、右手のルカによる福音書冒頭のフォリオと向き合っている。ルカの肖像は、マルコによる福音書テキスト最終フォリオのすぐ裏側に描かれている。マタイ、マルコの肖像も、ルカと同じように、福音書冒頭のヘッドピースと向き合っている。



福音書記者ルカ

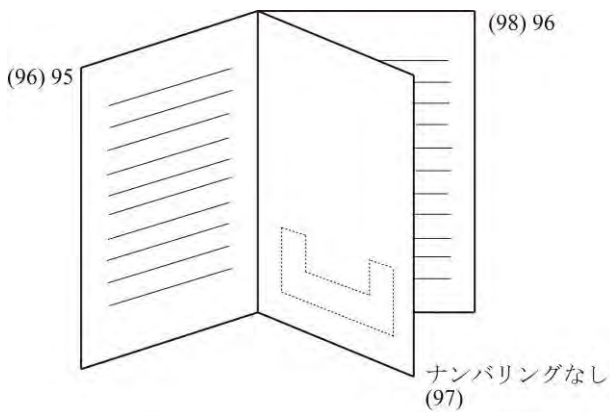


ルカによる福音書冒頭



ところが、ヨハネの肖像だけは、ヨハネによる福音書冒頭のフォリオと向き合っていない。ルカによる福音書テキストの最後のフォリオから、白紙をはさんで、次のフォリオに描かれている。

さらに、ヨハネのヘッドピースと向き合っている白紙のフォリオを見てみると、ヘッドピースの跡が二重になっている。このことから、この写本は製本のし直しが行われたことがうかがわれる。一度目の製本の時に跡がついて、二度目の製本の際に、わずかに上下左右がずれたために、二重に跡がついたと考えられる。



また、マルコによる福音書のテキストを途中で遮る形で、fol. 95とfol. 96の間に、いきなり白紙のフォリオが単独で挿入されている。このフォリオには、ヘッドピースの跡が上下逆さまについている。この白紙フォリオは、もともとこのような場所にあったのではない。なぜこのようにまぎらわしいことになっているのだろうか。

さらに奇妙なことに、巻末にばらばらに綴られているナンバリングなしの二葉には、それぞれヘッドピースとイニシャルの痕跡が見られる。つまり、現在巻末に綴られているこれらのパーチメントは、もともとこの位置にあったのではないことがわかる。

つまり、製本をし直す際に、巻末の二葉のように場所を移動させられたフォリオもあれば、ヘッドピースの跡が二度ついているフォリオのように、別の場所に動かされることなく、もともとあった場所に残されたまま製本し直しが行われたフォリオもあるということである。それでは、製本し直す前の状態はどのようなものだったのだろうか。それを再構成する前に、バーニー19番に見られる奇妙な点を三点あげておきたい。

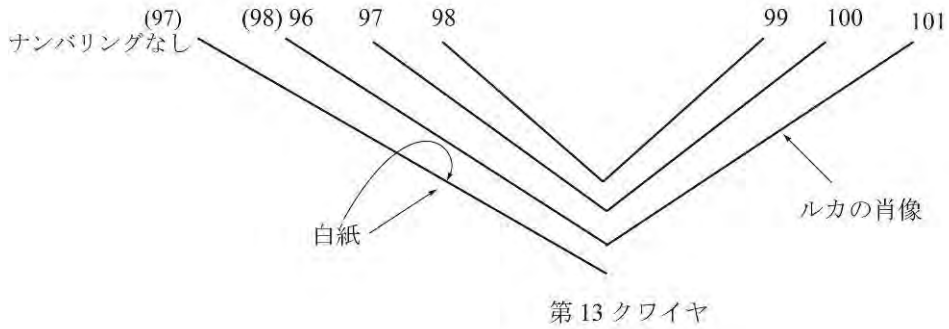
バーニー19番は、10世紀に制作された時点では、未完だったようである。ヘッドピースやイニシャルは丁寧に描かれており、本文も完成しているが、その他の要素が欠けている。たとえば多くの場合福音書写本には、章立てを表すケファライアが本文とは別のフォリオに挿入され、節を表すアンモニアン・セクションが本文のマージンに書き込まれている。ケファライアのように、どの福音書写本にもあるというわけではないが、巻頭に、エウセビオスの手紙やカノン・テーブルが挿入されることがある。巻末に、祭日のリストを記したフォリオが挿入され、レクシヨナリーの代用として用いることができるようになっている福音書写本もある。

大英図書館の福音書写本六十数点を見ると、バーニー19番のように、ケファライア、アンモニアン・セクション、カノン・テーブルなどの要素がまったくない、というのは例外的なケースであることがわかる。章や節を示すものが何もなく、文章だけがえんえんと続くという福音書は、実際に読もうとした時、使いにくかったように思われる。

事実、この写本は使われた形跡がほとんど見受けられない。パーチメントの質の良し悪しや、傷み具合によって、写本がどのくらい頻繁に使用されてきたか、ということ推し量ることはある程度可能である。多くの人に触れてきた写本はひどく傷んでいるため、バーニー19番のように傷みのない写本は、ほとんど開かれることがなかったのではないかと考えられる。不特定多数の人たちが頻繁に手に取って使用したというよりは、ごく限られた人だけが丁寧に扱い、特別の機会にのみ開いたと推測される。

もうひとつ注意すべきことは、フォリオに二度ナンバリングした跡があるという点である。まぎらわしいことに、一度目のナンバリングと、二度目のナンバリングは、一致していない。一度目のナンバリングでは数に数えられているのに、白紙だったために二度目のナンバリングでは数えられていないフォリオもある。このように現状のバーニー19番には、不自然に思われる点がいくつもある。

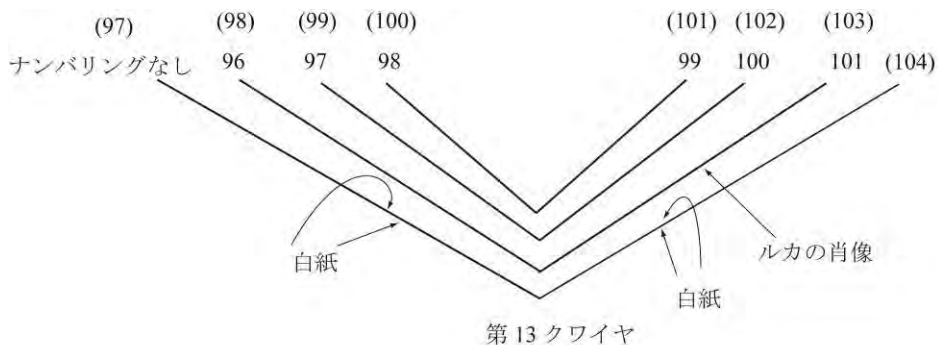
マタイ、マルコ、ルカの三人の肖像は、現在、各福音書冒頭のヘッドピースと向き合っているが、ヨハネの肖像だけがヘッドピースと向き合っていない。ところが、ヘッドピースの痕跡がある白紙のフォリオをてがかりとして再構成してみると、実は12世紀に肖像が挿入された時点では、四人ともヘッドピースとは向き合っていなかったことが判明する。そこで、ルカの肖像の部分为例にとって、12世紀の状態を再構成してみたい。



現在、ルカの肖像を含む第13クワイヤは、7フォリアからなっている。第13クワイヤには、白紙のフォリオが一枚含まれている。白紙のフォリオは、現在ナンバリングなしとなっているが、一度目のナンバリングでは97となっていた。ここでは、一度目のナンバリングをカッコの中にした。二度目のナンバリングの際、このフォリオは白紙だったためか、ナンバリングがなされなかった。このナンバリングなしの白紙フォリオには、ヘッドピースの痕跡が上下さかさまに残っている。この白紙のフォリオが、第12クワイヤと第13クワイヤの間にあると、テキストを遮っている。

ところで、巻末に綴じられているナンバリングなしのフォリオは、一度目のナンバリングでは、104となっている。こちらも白紙で、しかもヘッドピースの跡がついている。実は、この白紙フォリオと、第12クワイヤと第13クワイヤの間に挿入されているナンバリングなしの白紙フォリオは、かつてビフォルウムだったようである。一度目のナンバリングをてがかりに再構成してみると、かつてビフォルウムだったこの二枚の白紙のフォリアが、もともとどこにあったのかが判明する。

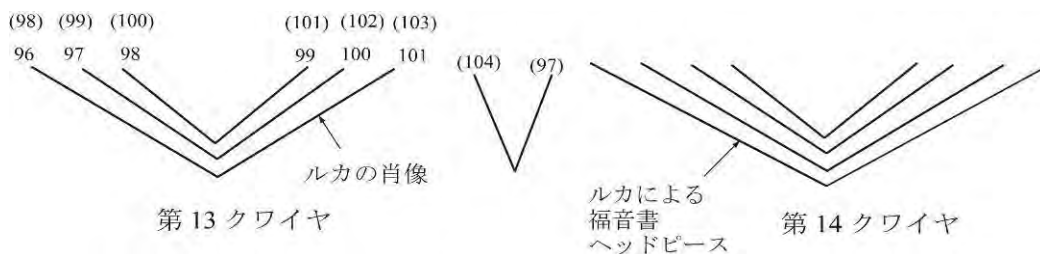
第13クワイヤは、現在7フォリアから構成されている。ナンバリングなしの白紙フォリオと、96から101までのナンバリングがなされた6フォリアである。ところが第13クワイヤは、かつて7フォリアではなく、通常どおり8フォリアのクワイヤだった。



巻末のフォリオは、一度目のナンバリングでは 104 であるため、白紙の 2 フォリア(97)と(104)は、かつてビフォルウムとして、第 13 クワイヤに含まれていたことになる。繰り返せば、かつて第 13 クワイヤを構成していたのは、白紙の(97)と(104)、そして(98)から(103)までの 8 フォリアである。

このように再構成してみると、一度目のナンバリングで(104)となっているフォリオが、かつて(105r)のヘッドピースと向き合っていたことがわかる。そのため、(104)にヘッドピースの痕跡が残っているのである。(104r)には肖像の痕跡もある。このことから、ルカの肖像(一度目のナンバリングでは 103v、二度目のナンバリングでは 101v)は、白紙の(104r)と向き合っていたことがわかる。この白紙フォリオ(104)は、肖像とヘッドピースを隔ててしまうものだったために、取り除かれて巻末に綴じられたのだろう。その際、白紙フォリオ(97)は切り取られることなく、このままの位置に残された。

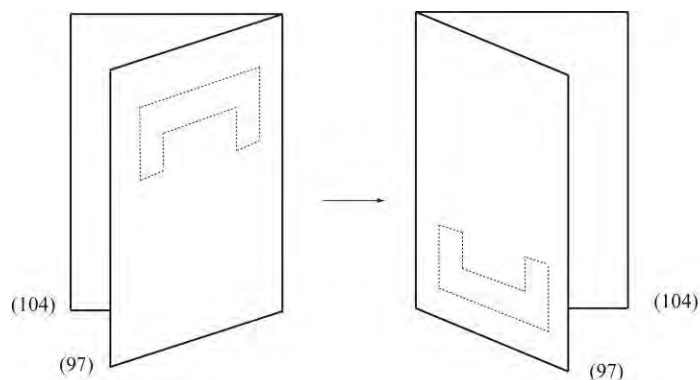
こうして、なぜ白紙フォリオ(97)がテキストとテキストの間に挿入されているのかが明らかになった。ところで、この白紙フォリオ(97)にもヘッドピースの痕跡があるが、それはなぜだろうか。第 13 クワイヤは、(97)から(104)の 8 フォリアからなるクワイヤであると書いたが、実はこれはオリジナルのアレンジではない。この状態からさらに遡ることができる。



白紙のビフォルウム(97)-(104)は、もともと第 13 クワイヤには属さない、独立したビフォルウムとして、第 13 クワイヤと、第 14 クワイヤの間に挿入されていたようである。第 13 クワイヤの 101 または(103)レクトでマルコのテキストは終わっている。そして、ルカのテキストは第 14 クワイヤから始まっている。おそらくこのビフォルウムは、第 13 クワイヤと第 14 クワイヤの間、すなわちマルコとルカの間に入れられ、ルカのケファライアと肖像のために準備されたものだったと思われる。ところが、ケファライアと肖像は描き込まれることなく、白紙のままのビフォルウムが残された。第 13 クワイヤは、もともと 8 フォリアでも 7 フォリアでもなく、6 フォリアだったということである。

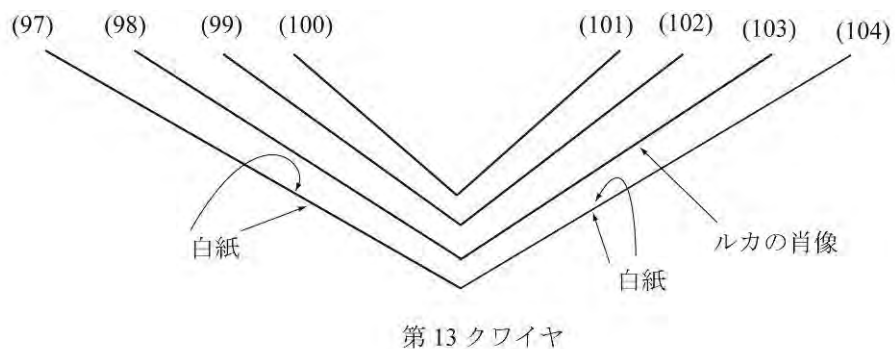
それでは、ここでオリジナルの状態から現在の状態に至るまでの順序を、再現してみたい。もともと白紙のビフォルウム(104)-(97)は、第 13 クワイヤと第 14 クワイヤの間の独立したビ

フォーリウムだった。ヘッドピースは、この時点で(97)に痕跡を残した。この時点で(97)はヘッドピースと向き合っていたからである。

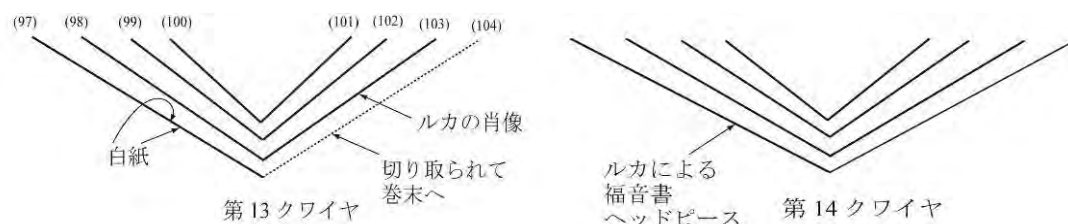


次の製本の際、このビフォーリウム(104)-(97)は上下逆さまにされてしまった。白紙であったために、天地を気にしなかったのだろう。

さらに、第13クワイヤと第14クワイヤの間で独立していたはずのビフォーリウム(104)-(97)は、第13クワイヤに組み込まれてしまった。



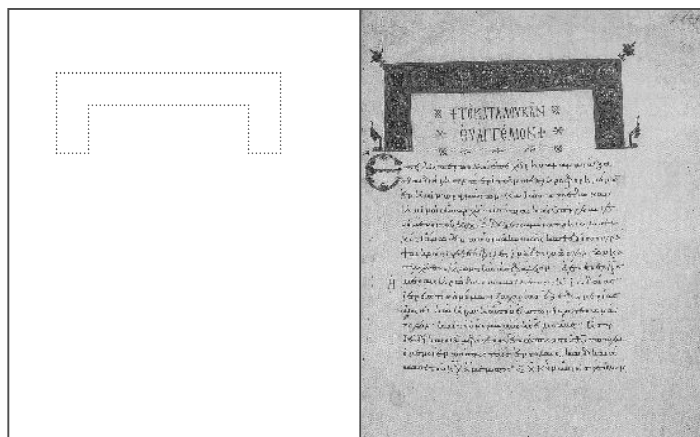
第13クワイヤがもともと変則的な6フォリアからなっていたために、通常どおりの8フォリアにしようとしたのではないと思われる。こうして、第13クワイヤは、8フォリアのクワイヤとなった。しかしその結果、テキストとテキストの間に、白紙のフォリオ(97)が割り込むことになってしまった。



続いて、ピフォルウムのうちルカの肖像とヘッドピースをさえぎる白紙のフォリオ(104)が切り取られ、巻末に綴られた。こうして第13クワイヤは、現状のように7フォリアからなるクワイヤとなったのである。

つまり、もともと福音書冒頭のヘッドピースの手前には、ケファライアと肖像を描くための独立したピフォルウムが準備されていたが、ケファライアは書き込まれることなく、肖像も描かれないまま、白紙のピフォルウムがそのまま製本された。肖像を挿入する時点で、ルカの肖像は(103v)に描かれた。つまり、肖像は福音書冒頭のヘッドピース(105r)とは向き合わず、白紙のフォリオ(104)と向き合っていたことになる。後に、肖像とヘッドピースを隔てる白紙フォリオ(104)が切り取られて巻末に綴られたために、現在では肖像がヘッドピースと向き合っている。

それでは、ヘッドピースと向き合うフォリオに白紙が準備されていたのに、画家はなぜそこに肖像を描き入れなかったのだろうか。

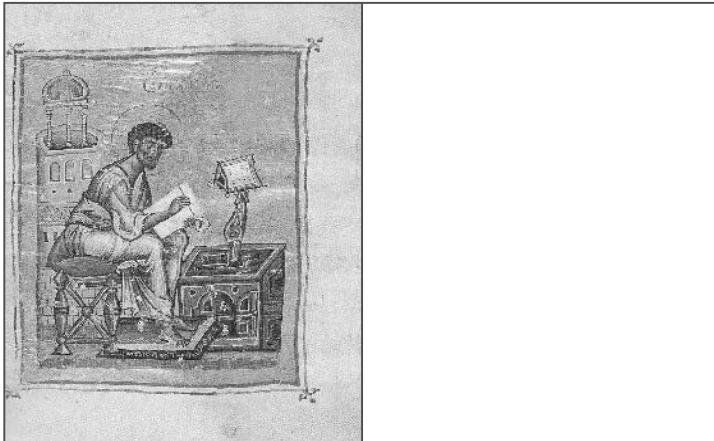


すでにその時点でヘッドピースと向き合う白紙フォリオには、ヘッドピースの跡がくっきりとついていたために、汚れたフォリオを避けて、真っ白のフォリオを選んだのではないだろうか。

現在、本は背表紙を手前にして立てて本棚におさめるが、写本は、横に寝かせて積み重ねて置かれていた。立てておくとパーチメントがだんだん外に向かって開いてしまうため、横に寝かせ

て積み上げ、上からの重しとしていたらしい。

本を閉じた状態で立てておいただけでは、これだけしっかりとヘッドピースの痕跡はつかないのではないかと思う。そのように写本が保管されることを考慮して、描き入れた肖像が隣のヘッドピースのフォリオに写ってしまうことがないように、あえて白紙のフォリオと向き合う場所に肖像を入れたのかもしれない。



肖像は、コキノバフォス・マスターの手によるものと言われている。高い技術を持つ画家が、新しい写本制作にあたって腕をふるうのではなく、過去に制作され、すでにそこにあった写本を再利用して、そこに挿絵を入れたとすると、なぜそんなことをしたのだろう、と疑問に思われる。新しい写本を制作する余裕がなかったからなのだろうか。筆者は、そのような消極的な理由から、古い写本が再利用されたのではないと思っている。

ここでは、福音書写本は読むためのものというよりは、高名な画家の手による貴重な福音書記者の肖像をおさめる、いわば箱のような役割を持っていたのかもしれない。肖像が描き込まれた時点でも、ケファライアやアンモニアン・セクションは追加されなかった。もし福音書を実際に使おうという意志があるとすれば、実用のために、ケファライアを入れてもよかったはずである。つまり、この写本は制作当初も、挿絵を挿入されたあとも、「読む」という目的のために、日常的に手に取って開かれるということがなかったと考えられる。ごくまれに開かれた時も、肖像はヘッドピースとは向き合わず、白紙フォリオと向き合っていたため、福音書の挿絵というよりは、アイコンのように見えたかもしれないと想像される。

本稿では、大英図書館所蔵の福音書写本バーニー19番をとりあげ、写本がたどってきた足跡を振り返ってみた。複数回におよぶ製本やり直しを経て現在のような形になった写本が、もともとどのようなものとして制作されたのか、ということを見てきた。コーディコロジカルなアプローチ

によって、現在写本はこのような形になっているけれども、もともとこういう形だったのではない、ということが明らかになった。こうした方法を用いることによって、イコノグラフィー研究とは異なる視点から写本を眺めてみるることができるのではないかと筆者は考えている。

Appendix

タイトル	Burney 19 四福音書
制作年代	10 世紀後半
フォリオ数	211
大きさ	220 × 170 mm
罫線	1 コラム 22 行
装飾	各福音書冒頭ヘッドピース、イニシャル (fols. 2r, 64r, 102r, 166r)
挿絵	福音書記者の肖像 (fols. 1v, 63v, 101v, 165r) 肖像は、12 世紀後半コキノパフォス・マスターの手による
製本	1913 年 厚紙の表紙 (大英図書館による) i-iii (巻頭) iv-vi (巻末) に 6 枚の紙を挿入
由来	1572 年、B. A. モンターノがフランドースで購入。1809 年、エル・エスコリアル、サン・ロレンツォ・エル・レアル修道院所蔵。その後、チャールズ・バーニー (1757-1817) の蔵書に。1818 年、大英博物館がバーニー氏の子息よりバーニー図書の一部として入手。fol. 210r にインスクリプションを消した跡あり。

写本構成

- i-iii 紙の挿入
- fol. I パーチメントの挿入
- fol. 1v マタイの肖像
- fols. 2r-63r マタイによる福音書
- fol. 63v マルコの肖像
- fols. 64r-101r マルコによる福音書
- fol. 101v ルカの肖像
- fols. 102r-164r ルカによる福音書
- fol. 165r ヨハネの肖像
- fols. 166r-210r ヨハネによる福音書
- 白紙のパーチメント 3 葉
- iv-vi 紙の挿入

参考文献

- Catalogue of Manuscripts in The British Museum*, I, part II: *The Burney Manuscripts* (London, 1840), 4, pl. I.
- O. M. Dalton, *Byzantine Art and Archaeology* (Oxford, 1911), fig. 429.
- W. H. P. Hatch, *Facsimiles and Descriptions of Minuscule Manuscripts of the New Testament* (Cambridge, MA, 1951), pl. xxiv.
- J. Beckwith, *The Art of Constantinople: An Introduction to Byzantine Art 330-1453* (London, 1961), 128, 132-33, fig. 170.
- Byzantine Art, A European Art, catalogue of the Ninth Exhibition of the Council of Europe* (Athens, 1964), no. 314.
- Gregorio de Andrés, *Catálogo de los códices griegos desaparecidos de la Real Biblioteca de El Escorial* (El Escorial, 1968), no. 52.
- Sever J. Voicu and Serenella D'Alisera, *I. MA. G. E. S.: index in manuscriptorum graecorum edita specimina* (Rome, 1981), 373.
- J. C. Anderson, 'The Illustrated Sermons of James the Monk: their dates, order and place in the history of Byzantine Art,' *Viator*, 22 (1991), 69-120.
- John Lowden, catalogue entry no. 176, in *Byzantium: Treasures of Byzantine Art and Culture from British Collections*, ed. by David Buckton (London, 1994).
- Kurzgefasste Liste der griechischen Handschriften des neuen Testaments*, ed. by Kurt Aland, *Arbeiten zur neutestamentlichen Textforschung*, 1 (Berlin, 1994), min. 481.
- Jeffrey C. Anderson, 'A Twelfth-Century Leaf from the Byzantine Courtly Circle in the Freer Gallery of Art (Freer 33.12),' *Gesta*, Vol. 35, No. 2 (1996), 142-148.
- Michelle P. Brown, *The British Library Guide to Writing and Scripts* (London, 1998), 37, pl. 31.
- Summary Catalogue of Greek Manuscripts* (London, 1999), I, 29.